

## 日本公衆衛生雑誌創刊50年を迎えて

日本公衆衛生学会誌編集委員会

委員長 岡崎 勲

副委員長 豊嶋 英明

日本公衆衛生学会の機関誌である「日本公衆衛生雑誌」が創刊50年を迎える慶事に当たり、編集委員会を代表し、当学会会員諸氏と共にこれを祝い、同時に本誌のさらなる発展を祈念して、一言述べさせていただきます。

創刊号を拝見しますと、財団法人 日本公衆衛生協会理事長 勝俣 稔先生が「創刊のこぼし」を書いておられます。その中に、「既往七十年を経た本会の沿革は、明治の初期に大日本私立衛生会として発程以来、云々」と書き起し「戦後の世運に即応して現在の会勢に発展し」本誌が刊行されるに至ったとあります。このことと、現在の日本公衆衛生学会の機関誌として本誌が発展した経緯は、50周年記念特集「日本公衆衛生学会と日本公衆衛生雑誌の沿革」の中に詳述されますので、ぜひこの機会に創刊から50年に至る先人の努力をお読み下さい。先人が「日本公衆衛生雑誌」の発展こそ日本の公衆衛生学会の発展につながると、努力した成果に改めて敬意を表する次第です。

創刊号は、昭和29年3月15日です。私事を述べることは恐縮ですが、私共はこの頃小学校を卒業し、中学に進学しました。今思い起すと、昭和25年に勃発した朝鮮動乱で日本では、糸偏、金偏の産業が大きく伸び、その後の高度成長期につながる曙光を見出した時期であったといえます。創刊号の冒頭を飾る論文は、野辺地慶三先生と加藤敏忠先生による「綜説原著実験 岐阜市の上下水道と腸チフスの年次的推移との関係について」の力作です。そのまえがきに、「昭和20年7月の空襲はこの模範施設の地上工作物を破壊したが、地下工作物が残っていたので、一度水洗便所の快適な味を体験した市民の大部分は彼等の住居再築の際水洗便所を再築し、昭和26年末には殆ど戦災前の状態に接近したのであった。」と岐阜市の復興の様子が書かれています。つまり、本誌創刊は世の中が落ち着き、人間らしい生活ができるようになり、次にこれからの文化的生活を求める澁淵とした機運のある時期であったといえます。第2号は平山 雄先生が、がん予防について書いておられます。

こうした創刊から最近に至るまでの内容の変遷について、創刊50周年記念特集として編集委員会が中心になって、50年間に掲載された全ての論文を分類して、分析してみました。本誌3月号に掲載される予定です。また、歴代編集委員長による、その時代を反映するテーマ、記憶に残る事を書いていただき、この50年を振り返る特集を企画しています。

バブル経済の破綻後、10年が経過し、なお経済不況は深刻で失業率はかつてない高い今日の社会情勢下で、保健・医療・福祉の発展をどう推進するかが求められています。合理性を求め様々な改革の嵐が、地域の保健・医療・福祉の分野に及んでいることは、ある意味では将来への期待につながると考えます。また、昨年（平成14年）7月に文部科学省及び厚生労働省から「疫学研究に関する倫理指針」が出されました。一昨年に出された「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」も併せてこれからの学問の進歩に影響するところは大きいと考えます。高度先進医療に代表される科学の進歩が、共に社会に貢献するためには常にこうした倫理上の社会的コンセンサスを踏まえて行われる必要があります。これからの公衆衛生学会の機関誌としてどうあるべきかを、創刊50年を記念して座談会を行い、誌上に記録を残すことを企画しています。

「少子超高齢化」時代に、またわが国の保健・医療・福祉は世界とのつながりを考えずしては発展しない今日、本誌の果たすべき役割はますます大きくなりつつあります。活発な寄稿がなされ、誌上討論を介して社会の期待に応え、公衆衛生の向上に寄与するよう、また本誌の向上に関するご助言が編集委員会になされますよう、当学会会員諸兄弟のご支援を衷心よりお願いする次第です。